

Title	文獻論叢(國立北平故宮博物院文獻館印行)
Sub Title	
Author	宮島, 貞亮(Miyajima, Teisuke)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.157- 158
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

釋

棕

(稻葉君山著
寶黃室藏版)

著者が還曆を自ら祝せられて數種の論文を集め、之に寫眞圖版及び論文著書目録を添えて出版せられたもの、本書の題名は卷頭論文「百濟の棕及び棕部」よりきざしてをる。本論文に於て著者は北史百濟傳に見ゆる棕部は、實は翰苑、三國史記より見れば棕部、原部が正しく、倉庫部を意味し、日本に於ても歸化人が此制度を傳へ、棕もクラと訓ずるのも歸化人の仕業であると云ひ、クラは本來朝鮮語であり、滿洲に於て行はれたが之は本來高句麗語「梓京」に由來するものであり、京は支那式のクラであり、高句麗は之を支那より輸入すると共に梓の字を配したのであり、そして梓が khur に近い方言を表はしたものであらう。我國にはクラの組織未だ發達せざりし時百濟よりこのクラの機構が我國に輸入せられ、我國の制度は之により大なる影響を與えられたものであらうと論ぜられてをる。著者の意見は如何にも示唆的であり、上代文化の潮流を示す上に極めて面白い研究であるが、我國で座をクラと云ひ、圍繞することをクルムと云ひ、岩、谷間をクラ、岩穴をヤグラなど云ふ習俗から考へると倉と云ふ語は全然輸入語であつたと考へるのは少し困難の様に思はれる。勿論著者はあへて日本上代にクラの存在を否定するのではないがクラの組織が極め

書 評

て發達してゐなかつたとし、その證としてホクラ(寶倉)を例とされ、ホはクラの形容詞であら、クラは神祠を意味し、最初神祠も倉庫も未だ別がなかつたからホクラなる造語が生れたのであらうとされてをるが然しこのホクラ、ホクラは博士の様に解される外に之を神體を納める^ホ宮の意味に解し、ラを單なる後添詞と見る民俗學的解釋法も存在し得るのである。更に著者はクラの語と高句麗語「溝渚」との間の關係を註の中に敘及せられてをるがこの「溝渚」といふ語は昔から問題の多いものであり、之を單に「倉」といふ名辭から解釋し去るのは如何かと思はれる。要す世人の注るに是等の名稱は今後なほ研究を要する問題であり、著者が之に意を喚起せられたことはまことに機宜を得たるものと云ふべく、願はくば學界が今後今一層廣い比較研究の立場から此興味多き疑問を検討して貰ひたいものである。「校倉の跡を探ねて」は此クラの型態はアゼクラ的の構築であると推定し、半島、樺太、滿洲に於ける同種の建築や土器遺物を尋ねた記文であり、「長生標及び長生庫」は高麗時代の寺院の經濟的機構であつた長生庫の性質、寺領の界標であつた長生標のことを解明されてをる。

本書はまことに史家、考證家として著者の風貌をしのばしむる好著述であり、著者が今後筆硯を新たにして益々學壇に雄飛せられんことを冀つて拙い紹介の筆を擱く。(松本信廣)

文 獻 論 叢

(國立北平故宮博物院
文獻館印行)

甲骨文字學、燉煌學及び檔案學は現今支那に盛行してゐる學問

(一五七)

一五七

であつて、それに關する論文著述等は尠くない。殊に檔案は明清史研究者の看過することの出来ぬ史料であり、近代史料中の白眉である。

明清の檔案は故宮文獻館内の内閣大庫、軍機處、及び内務府の三箇所に收藏されてゐるが、内閣大庫の檔案は曾て一部流出し、北京大學、中央研究院歷史語言研究所、及び旅順の庫籍整理處の三箇所に收藏されることになつた。此の庫籍整理處を筆者は參觀したことがあるが、其の整理事業は最近完了するに至つた。即ち大庫史料目錄六編が刊行され、其の他明季史料零拾、國朝史料零拾、太祖高皇帝實錄、史料集編初集、同二集等の貴重な史料が上梓されたのである。尙北平の文獻館も留學中見學したことがあるが、大部分南遷した後のため、現存檔案は甚だ少く、清軍機處檔案目錄其の他檔案の目錄書は少ないが、死兒の齡を數へるに等しく、一抹の寂しさは之を如何ともすることが出来なかつた。然し近時、南方及び北平二個所に於ける檔案の整理事業が大いに進捗したことは、學界のため寔に欣快の念を禁じ得ない。而して此の間の消息を雄辯に物語るものは實に此の文獻論叢である。

本書は北平故宮博物院十一週年紀念として去年の雙十節に文獻館より印行されたもので、一昨年の雙十節に故宮博物院十週年紀念として文獻館より刊行された文獻特刊と本書を併讀する要がある。

本書に収録されてゐる論文は大部分檔案に關したものである。次に主な執筆者諸氏と其の論題を掲げる。

清内閣漢文黃冊聯合目錄序

蔡 元 培

四庫提要中之周亮工

陳 垣

擬梁曜北答段懋堂論戴趙二家水經注書

孟 森

論清光緒時之財政

吳 廷 燮

庫倫方輿紀要序

吳 廷 燮

撫畿疎草跋 附張鳳翔列傳攷證

朱 希 祖

禹貢學會的清季檔案

顧 頤 剛

右の外、李德啓氏の滿文老檔之文字及史料、方甦生氏の清代檔案分類問題、張德洋氏の軍機處及其檔案、王梅莊氏の清代黃冊中之戶籍制度、單士元氏の清代檔案釋名發凡、單士魁氏の内閣大庫雜檔中之明代武職選簿等有益な記事が少くない。又本書に貴重な圖版が少からず収録されてゐる。筆者は文獻館長沈兼士氏其の他檔案整理に力を盡された諸氏に敬意を表し擲筆する。(昭和十二年一月、宮島貞亮)

觀智院本類聚名義抄

(貴重圖書)
複製會

類聚名義抄は漢字及び漢語を標出してそれに音訓并に國語を注記した古代の字書である。これは新撰字鏡のやうに漢字で委しく義を註するといふことが無く、又和名類聚抄のやうに漢語の出典を記すことも殆んど無いから、それらより遙かに多く日本化したもので、その體裁は漢和對照の字書といふべきものである。(山田孝雄博士同書解説)

こゝに複製刊行された類聚名義抄は觀智院本全部(十一帖)である。世に知られた類聚名義抄の異本は其他に西念寺本、蓮成院